

令和 7 年度 大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト
(ふるさとミライカレッジ)

若者の視点を取り入れたリノベーション・プロジェクト

成果報告書

令和 8 年 3 月

新潟県南魚沼市

目次

1. プロジェクトの概要	1
1.1 背景.....	1
1.2 地域課題.....	1
1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容.....	1
1.4 目標とする地域の成果	2
2. プロジェクトの具体的成果	3
2.1 プロジェクトの成果サマリ.....	3
2.1.1 ビジョンの共有	3
2.1.2 主体形成	3
2.1.3 ネットワーク形成.....	4
2.1.4 学び・改善のプロセス	4
2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績.....	5
2.2.1 法政大学による古民家改修プロジェクト.....	5
2.2.2 早稲田大学による公共施設改修プロジェクト.....	8
2.3 地域の成果と今後の展開.....	10
2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価	10
2.3.2 今後の展開.....	10
3. プロジェクトの実施体制.....	11
3.1 プロジェクト体制の全体像	11
3.2 プロジェクト体制内の役割.....	11
4. スケジュール.....	13
5. プロジェクトを通じて得られた効果	15
5.1 地域における効果	15
5.1.1 プロジェクト前後の変化	15
5.1.2 得られた示唆	15
5.2 自治体における効果.....	16
5.2.1 プロジェクト前後の変化.....	16
5.2.2 得られた示唆.....	16

5.3 大学における効果.....	16
5.3.1 プロジェクト前後の変化.....	16
5.3.2 得られた示唆.....	17
5.4 学生における効果.....	17
5.4.1 プロジェクト前後の変化.....	17
5.4.2 得られた示唆.....	17

1. プロジェクトの概要

1.1 背景

南魚沼市では近年、首都圏大学からのゼミ合宿やふるさとワーキングホリデーなど各種事業の実施により、関りをもつ大学や市内を訪れる大学生が増加し、地域住民との交流の機会が広がっています。特に、地域活性化に関心を持つ学生が増えており、地域課題解決への意識が高まっています。

1.2 地域課題

一方で、学生向けの宿泊施設が不足し、特に長期滞在を希望する学生にとっては経済的な負担が大きな課題となっています。このため、南魚沼市では、地域資源を活用した学生向けの長期滞在施設を整備する必要があります。加えて、人口減少に伴う空き家や未活用の公共施設の増加が地域の課題となっています。2009年 NHK 大河ドラマ「天地人」に際し史料の展示や上杉景勝、直江兼続両公の生い立ちを知るための資料館を市が建てたものの、大河ドラマの影響が年々希薄化し来館者が減少するとともに、国指定史跡である坂戸城跡の周遊拠点として価値を持て余している状況です。

1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容

大学の建築学科の学生をはじめ、デザインやアートに興味を持つ学生、さらには地域活性化に積極的に関与したいと考える学生を広く募集し、地域課題解決に向けた取り組みを行います。学生たちは、地域の実際のフィールドでの観察や住民へのインタビューを通じて、地域特性を反映した改修プランを創出し、これを実際の施設改修に結びつけます。改修後の施設は、学生が長期滞在するための拠点として利用されるだけでなく、地域住民との交流の場や、地域課題解決のためのアイデア創出を促進する拠点となります。学生が関与することで、地域の活性化に寄与し、学生自身も地域に対する理解を深め、実践的な学びの機会を得ることができます。

フィールドワークでは、南魚沼市は日本有数の豪雪地であり、伝統的な雪国建築様式である雁木を現代の商店街に取り入れている牧之通りや、商品の品質や価値を高めるために雪室を活用する施設といった雪国ならではの建築や歴史・文化について学びます。また、隣接する十日町市でドイツ人建築デザイナーのカール・ベックス氏による集落全体の活性化に成功した事例を視察し、古民家を再生させることによって地域がどのように再生したのか、その取り組みのプロセスや工夫について学びます。また、カール・ベックス氏から直接古民家の魅力や再生におけるポイントについて語っていただくことで、学生たちが実際の現場の知見や技術を得る貴重な機会となります。このほか、地域の抱える問題やその解決に向けたアイデアを地域住民と直接対話しながら探求し、地域のニーズに沿った改修案や活性化策を立案します。

1.4 目標とする地域の成果

本プロジェクトの最終的な目標は、古民家改修による学生の合宿拠点と、公共施設改修による地域活性化拠点を創出することです。大学生が自ら作成した改修案を自らの手で作業に携わることで、地域に対する愛着が深まり、地域課題の解決にも貢献できる環境を作ります。改修後の施設は、学生にとって学びの場であり地域住民との交流の場として機能し、地域と大学との関係を強化する重要な拠点となります。

また、長期的なプロジェクト実施により、参加学生との継続的な関係性の構築を目指します。学生が地域の発展に対して長期的に関与し、地域おこし協力隊やふるさとワーキングホリデー事業等の他の事業への参加に繋げ、地域活性化に意欲的な関係人口として定着を目指します。

そのほかにも、プロジェクトにおいて地元中高生と大学生が交流する機会を創出し、中高生にとって大学生から直接話を聞くことで大学進学を身近に感じる機会とするとともに、地域活性化に取り組む大学生と間近接することで、地元への帰属意識を高め、地域活性化に貢献する意識を育むことを目指します。

2. プロジェクトの具体的成果

2.1 プロジェクトの成果サマリ

2.1.1 ビジョンの共有

本プロジェクトでは、学生による施設改修を軸に、地域住民との対話を繰り返しながら、地域の将来像や課題認識の言語化を進めました。当初は、地域交流拠点としてどのような目的をもち、どのような位置付けとするか、学生・行政・地域住民の中で明確なイメージを持つことができていませんでした。フィールドワークや地域住民との対話を重ねる中で、雪国ならではの文化や改修する施設がそれまでになってきた地域の役割を学生が理解することができました。

これにより、法政大学と連携した古民家改修プロジェクトでは、これまでこの古民家自体が地域のなかでも人が集まるといった象徴的な役割を担ってきた、という背景から、今後宿泊に来た大学生だけではなく地域住民も利用ができるような空間を創り、そこから交流が生まれるような拠点として改修することとなりました。また、早稲田大学と連携した公共施設改修プロジェクトでは、元々史料館のための建物であったものを利用者数の増加を目的に、「観光誘客や地域活性化のための施設」に改修するというビジョンを、行政・学生・地域住民で共有しました。

それぞれのプロジェクトを進めるなかで、関係者間がどのような関りとなるのか図形化され、課題に関する共通認識と方向性への統一感をもつことができました。

2.1.2 主体形成

フィールドワークや共同生活を通じ、南魚沼市での生活をより身近に感じることができ、「自分ごと」として地域課題を捉えることができました。本取り組みにおいては、法政大学の古民家改修プロジェクトのなかで法政大学及び千代田区キャンパスコンソーシアムでの一般学生に対して、建築系学科の学生が改修した交流拠点を活用した地域活性化案の提案を最終的な目標に設定しました。当初は初めて訪れる土地に緊張し、どうしたらよいかわからない様子でしたが、共同生活で参加者同士が打ち解け、日常生活やフィールドワークで地域住民と対話し交流の機会を得ることで、南魚沼市で「暮らすこと」を実感し、地域課題を「自分事」として捉える意識が形成されました。主体的な意識形成がされたことで、最終的な目標であった地域活性化案において、参加者が南魚沼市での自身の経験や自分で考え、感じたことを踏まえた内容となりました。プロジェクトでは、一般学生10名のうちほぼ全員が、何かしらの形で南魚沼市（もしくは滞在施設）に訪れたいとの意向がありました。

また、学生が年間を通して南魚沼市を訪問し、地域住民や行政、地域おこし協力隊と交流し、信頼関係が構築されたことで、学生側から「こうしたい」を言葉にする雰囲気醸成

されました。地域住民も学生が真摯に改修作業や地域課題解決プロジェクトに取り組む姿を見ていたため、地域の大人も学生を受け入れる雰囲気が醸成され、地域にとっても主体性が育まれました。

本プロジェクトは、単なる参加体験に留まらず、地域に関わり続ける主体を育む契機となりました。

2.1.3 ネットワーク形成

本プロジェクトでは、法政大学、早稲田大学、南魚沼市（U&I ときめき課）、（一社）愛・南魚沼みらい塾、地元業者（大工など）が参画し、分野や立場を越えた協働関係を構築した。当初はビジョンの共有が進んでいなかったことや学生がどの程度まで改修技術があるのか、どの程度まで作業に関わればよいのかが分かりかねていましたが、学生が遠征を重ね、地元業者との打ち合わせや作業経験を重ねるうちに、協力関係が形成されました。

南魚沼市では、ふるさとワーキングホリデー事業等で一度本市に関りをもった若者を対象に、任意で参加ができるオープンチャットを令和7年度に地域おこし協力隊運営のもと開設し、定期的に市の情報をお知らせしています。本プロジェクト参加後も南魚沼市との繋がりを持ち続けられるよう、本事業参加者にもオープンチャットへの参加を促し、地域おこし協力隊との繋がりを形成しました。本市で活動する地域おこし協力隊員の特徴として、活動する地域おこし協力隊員12名のうち、20代が8名と年齢層が低いことがあげられます。本プロジェクトには、大学を休学し地域活性化に取り組む20代の隊員が運営に携わっていたため、参加する学生にとって同年代が地域活性化に取り組む姿を間近で見ることができ、キャリアについて知る機会となりました。協力隊と参加学生が同年代だからこそ、橋渡しとなり遠征時に協力隊と参加学生を地域のスポーツ活動に誘い、一緒に参加するといった関係性も生まれています。

行政としても、大学との連携を単年度に留まらず継続した関係構築に向け、大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクトに対する市独自の補助金を設置しました。

2.1.4 学び・改善のプロセス

施設改修を進める上で、学生の意向確認のために関係者間での打ち合わせの場を設定することに注力しました。遠征前には活動内容や準備品の確認を行い、現地滞在時に顔を合わせながら認識に齟齬が生じないよう課題を共有し合い、行政・学生・地域それぞれの立場で課題改善に向け行動しました。

改修案作成にあたっては、施設改修プロジェクトに携わっていただいた法政大学及び早稲田大学の両研究室が地域での施設改修活動にノウハウがあったため、学生が教授の指導をいただきながら「試行→地域からの意見→改善」のプロセスを主体的にスムーズに実施していました。地域の声や特性を加味しながら改善を繰り返す、という実践が学生にとっても社会へ出た際の重要な体験となり、大切な教育の場を提供できているということこ

ろに、大学と地域が連携する意義があります。

2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績

2.2.1 法政大学による古民家改修プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

古民家を改修し、ふるさとワーキングホリデー事業や大学実習を受入れられる学生の滞在拠点を整備することを目的とします。

2) 活動方法・内容

法政大学デザイン工学部建築学科赤松佳珠子研究室と協働し、改修案作成及び改修作業を実施（建築チーム。概ね8人）。また法政大学及び千代田区キャンパスコンソーシアムからの一般公募学生は、建築学部学生が改修する拠点を軸とした地域活性化案を提案（一般学生チーム。10人）。

3) 活動の工夫点

フィールドワークにより雪国の建築様式や古民家改修の実例を学びます。また、地域のキーパーソンや地域おこし協力隊員との交流の場を創出し、学生の地域活性化への意識を高めます。滞在中は共同生活により地域への理解を深め南魚沼市への愛着を高めるほか、ふるさとワーキングホリデー等への既存事業への参加等、相乗効果を高めます。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

本プロジェクトは概ね3つの段階（導入期間（6月）→作業期間（8～11月）→まとめ（2月））に分けられます。

導入期間である6月は、建築チーム・一般学生チームともに上記 1.3 で示したフィールドワークを実施し、雪国の歴史と文化、人々の知恵を学びました。また、建築チームは事前に考案した改修案6つを発表し、地域住民や地元大工から意見をいただきながら、1つの改修案へまとめ、まずは“活用方法を確定させずに多目的な空間を作り、地域の方々と長い時間をかけ活用しながら、役割を見つけていく”方向としました。

作業期間では建築チームは8月、10月、11月に滞在し改修作業を行い、一般学生チームは8月、10月にそれぞれ滞在しました。特に、8月は学生が夏季休暇ということで宿泊拠点に8日間滞在し、それぞれの目標に向かって本格的に活動を始めました。建築チー

ムが改修作業やワークショップの準備をしている様子を見ていた近所の工務店の方が、「使われなくなった瓦があるから何か使えないか」と提案をいただくことができました。学生が真摯に改修する姿や対話をする中で、地域住民が学生の「やりたい」を受け入れ、「何か協力したい」という意識が形成されました。また、ワークショップでは蔵の装飾のためのタイル作成と椅子や机にもなる家具作りを行い、自分が思う「ふるさと」を表現しました。ワークショップに参加した子供からは大学生たちに「また来たら教えてください」という声もあり、作業を通じて交流を深めることができました。その後の10月、11月では、8月の残りの作業を実施しました。

一般学生チームは建築チームとは別で、市内で地域資源を生かした事業をされる方に話を聞いたり、湧水を飲んだり伝統文化経験をしたりと、南魚沼市で暮らすことを実践しました。また建築チーム主催のワークショップ運営にも携わり、地域住民と交流しました。10月には、地域の中高生が地域探究成果報告を行う会に一般学生チームも参加し、8月までに体験したことを基に、地域活性化案を考察し発表しました。

2月ではこれまでの活動の総括として、建築チーム・一般学生チームともに成果を報告しました。また、建築チームは蔵が交流拠点となるための照明設備を整え、完了しました。



【建築チームによる家具製作ワークショップの様子】
ぶ一般学生チーム】



【地域有識者からの食文化について学

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

建築チームにおいては、夏のワークショップでの「自分が思う『ふるさと』」を表現した装飾等を使用し、蔵の改修を完了させました。地域の方々から意見をいただきながら「地域や滞在者の想いを残し、みんなでつくる場」をコンセプトとし、蔵の改修を完了させました。次年度以降については、夏の経験から「地域の子どもたちともっと関りをもちたい」「瓦の利用のように地域の方と交流する場をもっといれていきたい」という学生の意見を尊重しつつ、地域の意向を取り入れながら地域交流拠点としての活用を進めます。また、半年間ずっと監督指導いただいた大工さんと仲良くなり、技術的な面や雪国の建築等について色々な話をされ、地域を深く知るきっかけになりました。

一般学生チームは宿泊施設紹介班と施設周辺地域紹介班に分かれ、フィールドワークで地域の人から伺った話や学生が感じたことを紹介しつつ、宿泊施設を紹介するポスター

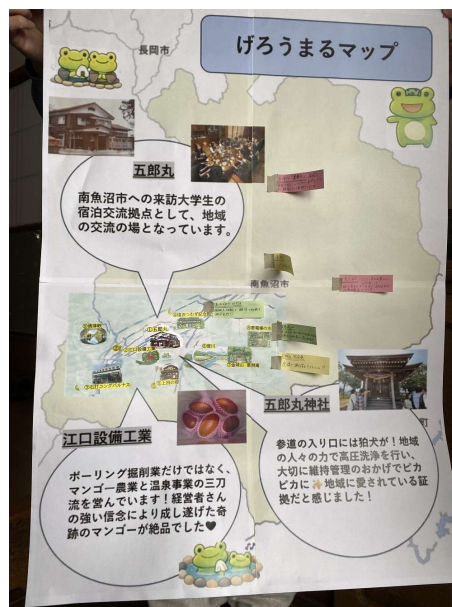
と、今後施設を訪れた人が書き込むことができ「皆で育てていくマップ」をポスター形式で作成しました。参加者からは「4回の遠征でこの宿泊施設に愛着が湧いた」「居間に集まって団欒することの価値や意義を感じた」「南魚沼にまた来たい」という声がありました。また、建築チームと同じように「人の思いを次につなげていく」を大切にされた成果物であり、参加者も愛着がでたからこそ地域活性化を自分事と捉え、想いのこもった発表となりました。このことから、本事業を通じて参加者の南魚沼市への愛着形成や地域が若者と関わる機運が醸成されました。



【拠点として整備された蔵】



【施設周辺地域紹介ポスター】



【宿泊施設紹介ポスター】



2.2.2 早稲田大学による公共施設改修プロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

価値を余している公共施設を改修し、観光客誘致や地域の憩いの場としての拠点整備が目的です。

2) 活動方法・内容

早稲田大学創造理工学部田中智之教授研究室と協働し、改修案作成及び改修作業を実施。

3) 活動の工夫点

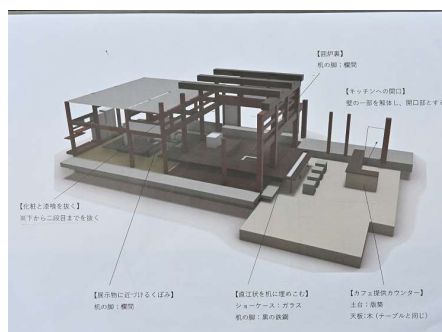
フィールドワークにより雪国の建築様式や古民家改修の実例を学びます。また、地域のキーパーソンや地域おこし協力隊員との交流の場を創出し、学生の地域活性化への意識を高めます。滞在中は、ふるさとワーキングホリデー等に参加する他大学生等との交流を促進し、その後の他事業への参加を促すなど相乗効果を高めます。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

6月に公共施設を来訪し、市からの改修目的と現地確認を踏まえ、「開放的な空間創出」、「休憩室やカフェなど多くの人が利用できる施設への改修」を軸に改修案を考案する方向性となりました。

学生に改修案を出していただいた後、施設担当部署や地元大工と大学を Zoom で繋ぎ、雪国の暮らしの様子を踏まえながらブラッシュアップを繰り返しました。この施設の問題点は、冬季に2m近い積雪があるために雪を考慮し、積雪に耐えうる建築案でなければならないという点です。地元大工に雪国ならではの技術的な違いなど実務的な意見をいただきながら、最終案を作成しました。この最終案をもとに、行政内の部署や関係団体と意見のすり合わせを繰り返し、方向性や認識を合わせました。

8月の長期滞在では、学生が施設内を採寸し最終案の3Dイメージ図を作成しました。この3Dイメージを基に地元大工と相談しながらシミュレーション学習として実際の組み立て作業を行い、案の実現可能性について考察しました。フィールドワークとして、隣接する十日町市のドイツ人建築デザイナーであるカール・ベックス氏を訪ね、古民家再生の実例を学習しました。



(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

対象の公共施設については、更なる活用方法についてこれまで長年議論されてきましたが、関係団体の思いもありなかなか次のステップに進まない状況でした。しかし、学生ならではの新しい発想による改修案を提示し、長期的により多くの人に利用してもらうための拠点として改修することを説明させていただき、改修への了承を得ることができました。この動きが大きな成果となりました。

付带的効果として、学生が手がけたという付加価値のある公共施設となり、学生にとっても思いが残る場所になりました。



【実際に完成した1枚の大きなテーブル】



【テーブルを囲む学生】



2.3 地域の成果と今後の展開

2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価

2つのプロジェクトそれぞれの拠点を整備することができたことはもちろんのこと、建築学部学生にとって、雪国ならではの建築方法をフィールドワークや地元大工から学び、改修を通じてまちづくりについて考え、改修案を作成し、自らの手で実践するという教育の場を提供できました。

また、フィールドワークや長期的な滞在により、南魚沼市の歴史や文化を学び、地域に対する愛着が深まりました。参加者のなかには地域活性化に関心が高く、市が実施する他の事業に参加するなど、関係人口としての広がりがありました。

地域にとっても、大学生が地域課題解決に取り組む姿を間近でみることで、交流に意欲的になり大学生を受入れる機運醸成に繋がりました。

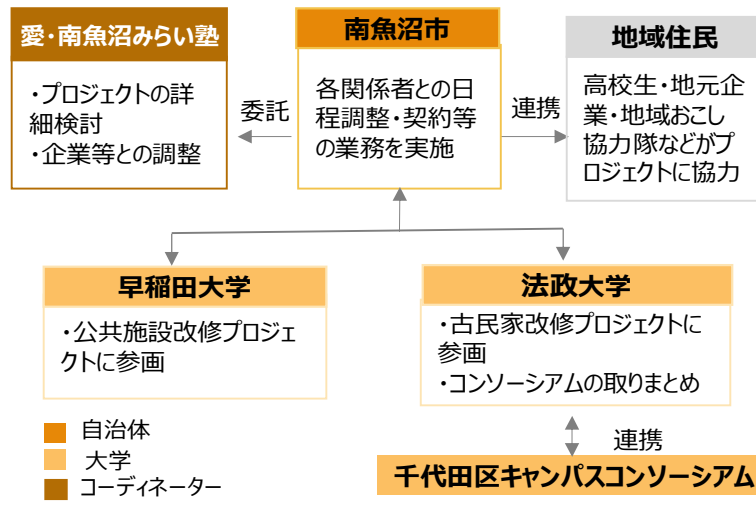
目標とする地域の成果(実施計画書)	達成状況・結果評価	
古民家および公共施設の改修と学生拠点の創設	◎	改修が完了し、交流拠点としての機能が整備された。
地元中高生との交流と進学への意欲向上	△	大学生と地元中高生との交流の場を設置し、大学生にとって中高生から刺激を貰う機会となった一方で、中高生側の意思を確認する機会がなかった。
学生の関係人口としての定着と地域貢献	○	参加学生(合計24人)のうち半数以上が、「またここに来たい」と定期的な訪問の意思を有していた。また、地域おこし協力隊に興味のある学生が1名いたほか、一般学生のうち2名が他事業への参加があった。

2.3.2 今後の展開

法政大学赤松研究室は引き続き、古民家にて蔵等の拠点を整備しつつ、地域内の中高生や住民と交流できる機会を設定します。早稲田大学田中研究室も引き続き、公共施設の改修に関わりつつ、拠点を中心とした周遊プラン考案に協力いただき、南魚沼市の地域活性に寄与いただきます。今後も、学生が地域資源や自然等に触れる機会をつくり、地域との交流を図ります。

3. プロジェクトの実施体制

3.1 プロジェクト体制の全体像



3.2 プロジェクト体制内の役割

所属/氏名	本プロジェクトにおける役割
自治体	
南魚沼市 U&I ときめき課	各関係者との日程調整、契約・支払い業務
南魚沼市商工観光課	公共施設の管理
大学高等教育機関	
法政大学総長室付教学企画室 藤原敏彦	法政大学及び千代田区キャンパスコンソーシアム内での南魚沼プログラム作成、学生公募、現地引率(とりまとめ)
法政大学政策創造研究科 教授 増淵敏之	一般学生チームの地域活性化案作成の伴走
法政大学デザイン工学部 教授 赤松佳珠子	古民家改修プロジェクトに参画し、学生の改修案作成等へ伴走。
早稲田大学 創造理工学部 教授 田中智之	公共施設改修プロジェクトに参画し、学生の改修案作成等へ伴走。
コーディネータ	
一般社団法人愛・南魚沼みらい塾 理事 倉田智浩	学生受入とプログラムの実施、関係者との調整
地域の方々	

(有)東和工務店 桐生和幸	法政大学による五郎丸蔵改修プロジェクト 担当大工
(株)大平建設工業 大平秀司	早稲田大学による伝世館改修プロジェクト 担当大工
カールベックスアンドアソシエイト(有)	古民家再生の実例としてのフィールドワーク受け入れ
上田史談会 大嶋匡	直江兼続公伝世館改修の関係者との調整
プロジェクト参加学生	
法政大学 一般学生10人	学生滞在拠点を中心とした地域活性化案作成
法政大学 赤松研究室 8人	古民家改修による学生滞在拠点整備
早稲田大学 田中研究室 7人	公共施設改修による交流拠点整備

4. スケジュール

実施時期	活動実績(法政大学)	活動実績(早稲田大学)
2025年5月	5/15:打ち合わせ(Zoom) 5/17:法政大赤松研究室 事前フィールドワーク(1日間/8名参加)※経費対象外 5/28:打ち合わせ(法政大学内)	
2025年6月	6/21~22:改修案コンペ&フィールドワーク(2日間/21名参加(教職員含む))	6/22~23:フィールドワーク、現地確認(2日間/学生4名、教授1名)
2025年7月	7/14、7/24:打ち合わせ(Zoom) 7/31:赤松研学生現地確認のため来訪 ※経費対象外	7/22:打ち合わせ(Zoom)
2025年8月	8/4~12:改修作業、フィールドワーク、ワークショップ(9日間/赤松研8名、一般学生10名、教職員4名)	8/7~11:改修案作成、フィールドワーク(5日間/学生6名)
2025年9月		9/12:担当課を含めた打ち合わせ(Zoom)
2025年10月	10/1:打ち合わせ(Zoom) 10/4~5:改修作業、耐震計測(2日間、赤松研究室6名、同大浜田研究室4名) 10/18~19:市の地域課題発表(2日間/一般学生9名)	
2025年11月	11/5:耐震計測結果打ち合わせ(Zoom) 11/18:一般学生最終報告にむけた進捗確認(Zoom) 11/22~23:改修作業(2日間/赤松研8名)	関係者打ち合わせ
2025年12月		12/17:早稲田大学訪問 12/27~30:改修作業(4日間/学生10名)
2026	1/19:一般学生の最終報告会に向け	

年1月	た進捗確認 (Zoom)	
2026 年2月	2/4～5:最終報告会(2日間/赤松 研8名、一般学生7名、教職員3名)	地元業者による改修作業
2026 年3月		3/2～5:改修作業、フィールドワ ーク(4日間/学生15名、教授1 名)

5. プロジェクトを通じて得られた効果

5.1 地域における効果

5.1.1 プロジェクト前後の変化

地域課題に対して、地域住民が“自分も関わってもいいんだ”という雰囲気が醸成され、主体的に大学生と関わることへのハードルが下がりました。もともと本地域では大学生世代がほとんどおらず、若者が地域にいること自体に対する関心は高い一方で、「どのように関わればよいのか分からない」という戸惑いがあり、関係性の構築には至っていない状況でした。

法政大学との6月の意見交換会では、地域住民側は古民家を管理していた方や区長といった関係者のみの参加にとどまったものの、最終報告会ではお声を掛けた方が近所のお友達を連れてきてくれるなど、「自分もいっていい場所なんだ」と感じられる機運が醸成されました。また、今回来られなかった人向けに、発表内容をまとめたチラシを後日回覧板で回してくれ、地域の関心が高まっています。加えて、夏の滞在期間中に学生が地域内を歩き、ワークショップの案内や活動内容の説明を直接行ったことで、地域住民が学生の取り組みを身近に感じるようになり、日常的に声をかけたり見守ったりする関係性が生まれました。その結果、ワークショップには地域住民や子どもたちの参加が広がり、施設周辺で工務店を営む地域の方から「使われなくなった瓦を活用できないか」といった提案が寄せられるなど、これまでには見られなかった自発的な関与や新たな連携が創出されました。

5.1.2 得られた示唆

古民家改修プロジェクトを実施する地域では大学生世代が地域にいないため、若者が“地域内にいる”というだけで近隣住民からの関心は高い反面、若者が来ていてもどのように関わっていいかわからない状況でした。しかし、夏の滞在中に学生がワークショップの宣伝やフィールドワーク等で、直接近隣住宅を回り“何をしているのか”を周知したことをきっかけに、近隣住民に気にかけてもらえる雰囲気が創られたため、「プロジェクトの趣旨」を広報することが大切であるという示唆が得られました。このように、活動内容や目的を直接伝えるプロセスが、地域住民の理解と関心を高める上で非常に重要であることが確認されました。また、地域住民の関心を実際の行動につなげるためには、単なる情報発信にとどまらず、関わり方が具体的にイメージできるような場や機会を設けることが必要であると考えられます。例えば、ワークショップへの参加や簡単な協力といった「関われる余白」を設計することで、主体的な関与を促進することが可能となります。

以上より、プロジェクトの趣旨を丁寧に広報することに加え、地域住民が関わりやすい導線を設計することが、地域全体を巻き込む上で重要であることが得られました。

5.2 自治体における効果

5.2.1 プロジェクト前後の変化

公共施設改修について、これまでは部署間で課題感や温度感の差がありましたが、相互に話し合いを繰り返すことで、認識を共有することができました。本施設は来館者の減少により活用のあり方が課題となっていたものの、関係団体の意向や調整の難しさから、具体的な改善には至っていない状況が続いていました。本プロジェクトでは、学生を交えながら施設担当部署や関係者との対話を重ねることで、従来とは異なる視点からの意見が提示され、議論が活性化しました。特に、学生による柔軟な発想や利用者目線の提案が加わることで、関係者間の共通認識が形成されやすくなり、改修の方向性について具体的な合意形成が進みました。

さらに、学生が実際に現地で改修作業に関わる姿が可視化されたことで、関係団体や地域住民の理解を得ることができ、これまで議論にとどまっていた内容が実行段階へと進展しました。

今回のプロジェクトをモデルケースとし、大学連携をさらに拡大させるため、市内にフィールドワークに訪れている大学を中心に包括連携協定を2大学と締結しました（他3校と調整中）。また、大学との連携を継続的に推進するための制度や支援のあり方についても検討が進められています。

5.2.2 得られた示唆

外部の視点を取り入れる際には、まずは受け入れる側の体制を整え、「どうしてほしいか」を明確にしておくことが必要不可欠です。目的や期待する役割が不明確なままでは、外部人材の力を十分に活かすことができないため、事前の整理が重要であることが確認されました。また、しがらみにとらわれない外部人材（学生）の存在が、既存の関係性や前提にとらわれない新たな視点をもたらし、長年停滞していた課題を前進させる契機となることが明らかとなりました。特に、実際に行動を伴う形で関与することで、関係者の納得感を高める効果があると考えられます。

さらに、自治体と大学の長期的な連携のためには、金銭面等で自治体と中間支援組織と大学が相互に協力できる体制づくりをする必要があります。単発の取組にとどめず、継続的な連携関係を構築するための仕組み設計が今後の重要な論点となります。

5.3 大学における効果

5.3.1 プロジェクト前後の変化

南魚沼市の取り組みを理解いただき、市の他事業でも協力をいただくなど、地域・大学間での相互の協力体制が構築されました。また、地域との連携を強めるため、包括連携協

定を検討することとなりました。本プロジェクトを通じて、大学側においても地域との関係性を単発のフィールドワークにとどめるのではなく、中長期的な連携として捉える動きが生まれました。現地での活動を通じて、学生や教員が地域の課題や特性を深く理解することで、継続的に関わる意義が共有され、他の研究活動や教育プログラムへの展開も期待される状況となっています。

また、大学が持つ知見やノウハウを地域の実践に活かすことで、地域と大学が相互に価値を提供し合う関係性が構築されつつあります。

5.3.2 得られた示唆

大学からは現地でのフィールドワークを通じた改修案考案、それを実際に作業することで「生きた教育ができる場所」として評価をいただきました。南魚沼市は食・文化・自然といった地域資源が多く、教育の場としての価値を高められるという可能性が示されました。また、実際の地域課題に対して試行錯誤しながら取り組むプロセスそのものが、学生の学習効果を高める要素となることが確認されました。机上での学習に比べ、現場での実践を伴うことで、より深い理解や主体的な学びにつながることを示されています。

さらに、地域側にとっても大学との連携は新たな知見や人材を取り込む機会となり、双方にとって価値のある関係性を構築できる可能性があることが示唆されました。

5.4 学生における効果

5.4.1 プロジェクト前後の変化

フィールドワークや共同生活、繰り返しの訪問により、南魚沼の地域や文化を理解し、主体的に地域活性について考える姿勢へと変化しました。そういった変化により、複数の学生から最終報告時に「またここに来たい」という言葉がでてきました。

プロジェクト当初は、初めて訪れる地域での活動に戸惑いが見られたものの、地域住民との対話や共同作業を重ねる中で、徐々に関係性が構築され、自ら積極的に関わろうとする姿勢が見られるようになりました。

長期的な関わりを通じて、信頼関係が構築され、地元工務店や地域の方と積極的に会話する姿勢がみられるようになりました。

また、活動の中で学生自身が役割を見出し、自ら提案や発信を行う場面も増え、地域との関係性を主体的に築く意識が醸成されました。

5.4.2 得られた示唆

共同生活の思い出や自分が関わった足跡が残ることが、地域や施設への愛着形成に繋がることから、「ここにまた来たい」と思えるようになるには、いかに人の思いを残すのが重要であることが得られました。

また、地域の方々との直接的な対話や協働の機会を継続的に設けることが、当事者意識の醸成に大きく寄与することが確認されました。今後は、学生の関わりが一過性で終わらないよう、関係性を維持・発展させる仕組みづくりが重要であると考えられます。さらに、プロジェクト終了後も関係性を維持・発展させる仕組みを設けることで、関係人口の創出や将来的な再訪・関与につながる可能性があり、継続的な関係づくりの重要性が示されました。

令和 7 年度大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト(ふるさとミライカレッジ)

成果報告書

若者の視点を取り入れたリノベーション・プロジェクト

令和8年3月13 日

新潟県南魚沼市
